

アメリカにおける生涯教育の一考察

<目次>

はじめに—アメリカに住んで

I Constant Changeこそ生涯教育

II 新しい試みを歓迎する社会背景

III アメリカにおける生涯教育

IV 生涯教育のカリキュラム例としてWeber State Universityの場合

V 結び

佐藤 俊子

はじめに — アメリカに住んで

1991年8月からアメリカ西部のクロスロード、ユタに四カ月住んだ。乾いて晴れあがったまま、雨一滴落ちてこない夏のユタ、灰色一色の曇り空のユタ、紅葉のユタ、夜中、ジリジリと雷の音の鳴り止まぬ初冬のユタ、遠い山々に雪が定着し、一際美しい冬景色のユタ、そして日本では見たこともない印象派の絵のような美しい真っ赤な日没を毎夕眺めるうちに四カ月の歳月が流れていた。ユタの面積は本州とほぼ同じ22万平方km、人口は170万、札幌の人口を本州一帯にまきちらしたような感じだ。広大の一語につきる。

旅行をしたかとおよく聞かれる。日本からの旅人であってみれば当然だ。ところが私はあまり良心的な観光客ではない。月曜から金曜まで、およそ一時間のドライブというおまけつきで、琵琶湖の9倍はあるという湖の街ソルトレイクシティから北のオグデン、南のプロヴォと二つの大学に出講し、土、日は少々疲労気味でダウンタウンへ出かける程度。ホテルに駐車中の車のナンバーでアイダホとかコロラドとかネバダというユタ周辺の州の名前を見かけるだけ。海外生活というにはまったく冴えない日々である。その上、雪国のせい、家の屋根の格好も樹木もなんとなく北海道に似ており、どうも外国に移り住んだという気のしないこともしばしば。ステイトから車で坂道を降りてくると、札幌かと錯覚する。

しかし油断は禁物。ここはアメリカである。万事りコンファームぬきでは

事が運ばないいいかげんな仕事ぶり。生活が忙しいだけに、忘れるスピードも速いからだろう。うしろのうしろの車が勝手にぶつかってきて、前の前にただ止まっていただけの日本人の車が悪いと文句をつけてくる身勝手さ。おかげでオフィサー・スミスから呼び出しがかかる。不条理な自己正当化でも積極的な自己主張であってみれば、こちらもゆずってばかりはいられないのがアメリカ社会。あらゆる催しの予告には通告なしに料金や日程、演目に変更がありうるという無責任な但し書きが必ず添えられている。アメリカがときにははたりの国であってみれば、うそも教えられかねない。他者を信用してはいけない、たえず疑ってみなければならぬ、頼れるのは自分の眼だけ、などという単純な真実が身につくのに、アメリカではあまり手間取らないようだ。まったく疲れる日常ではある。

しかし、この四カ月、見ず知らずの異邦人である私に、アメリカの大学で教え、外から観察するだけでは把握しえない貴重な異文化体験を積む機会をまったくあっさりと提供してくれたのもまたアメリカ人である。前例にこだわらず、新しい未知の領域に進んで侵入し、変更などものともしない、アクティブで明朗この上ないアメリカ人なのである。まったくあてにならないかと思えば、あてにも頼りにもなるアメリカ人、こちらから発信さえすれば、およそのことはただちに実現すると思えるほどだ。一年もアメリカに暮したら、私はとんでもない楽道家になるだろうと思う。

アメリカとか、アメリカ人がよくわからぬままに、日常のこまごました事柄すべてにまごつき、つまづきながら、それでも私はWeber State UniversityのDepartment of the Performing ArtsとUniversity of UtahのDepartment of the Continuing Educationで秋学期の授業に突入した。IDカードを渡され、車のライセンスもとれぬうちから駐車場をあてがわれ、SS#を取りに事務所へ走った。オフィスに、教室のかぎまで持たされた。講義は50分で週3回で3単位、タイトルはIntroduction to Dance、実技はIntermediate Ballet、90分週2回で1単位、それに11月2週にわたる6回上演のChoreographer's Showcaseの振付けとリハーサル(1単位)が加わるから準備を含めると、学生と共に忙しい。授業は土、日を除けば、朝8時半から夜10時まで、学生もスタッフももちろん大学の建物もフルに活動している。夜学生への配慮だろうが、図書館は夜中の12時まで開けている。よく動き、よく働く。変更、変化、変貌への火のようなエネルギーは創造的実現をかきたてる。

子供から老人にいたるまで、自己表現を模索し、創造的意欲を燃し、自分の個性を主張する。個を主張することを意識的に練習しているのではないかとさえ思う。どんな大学にも大小含めて三つや四つの劇場があり、札幌よりはるかに小さい都市に常設のオペラハウスやシンフォニーホールがあり、プロのシンフォニー、オペラ、バレエ、劇団がそろっているのも、アメリカ人の creative fulfillment 創造的実現への自然な欲求の故かと思う。芸術はアメリカ人にとって、他人事ではない、自分自身の欠くべからざる表現であり、主張であるかのようだ。プロもアマも、子供も学生も一緒になってよく歌い、踊り、演ずる。自己主張に確信があるからか、表現も演技もなめらかで美しい。練習時間がそれほど多いわけでもないのに、よくまとまり、よく仕上がる。確信に満ちた個の集団だからかと思う。

ともあれ、アメリカに住んでみなければ、まったく気がつかなかったこと、見えなかったこと、考えもしなかったことが日々を増してくる。それは他者のうちに、他者よりもっと多く自分自身のうちに、とりわけ無意識の領域のうちに、日々に見られる。それがいかに散漫な、あまりあてにならない印象であるにせよ、私がなにかアメリカについて書こうとすると、どうしてもベースになってしまうことを、はじめにお断りしておきたい。とりわけ生涯教育についてのレポートをまとめてみたいと考えた背景には、それがいかにもアメリカ的な合理主義の上に立つ教育のシステムであり、これに接近することは私なりにアメリカを解明する一助になるように思えたこともあることを付記しておきたいと思う。

I Constant Changeこそ生涯教育

まず生涯教育とは「絶えざる変更 (constant change)」であるというカリフォルニア大学の Keith Sexton 教授の発言が私をとりこにした。長い日本の歴史が日本列島三島の歴史であり、百年そこそこの歴史しか持たない北海道が今もおひきざっているギャップというか引け目のようなものを知っている私には英米文化を比較する際、アメリカ側の旧大陸ヨーロッパに対するコンプレックスの問題がいつも気になった。

事実、アメリカは旧大陸からの移民の国であり、建国当初は無論のこと、東から西へ開拓前線を進行させるに際しても、生活の確立が急務であり、荒々しい自然や巨鯨やライオンと戦うことが先決問題であり、教育も文化もあと

まわしであった。1920年代世代の若者たちがようやく文化的でありたいと望んだとき、彼らはバリ左岸でのポヘミアン暮らしと祖国放棄を通過しなければならなかった。アメリカで教育が脚光を浴びるためには1945年まで待たなければならなかったほどだ。

もともと、旧大陸から移住してきたアメリカ人が旧大陸の人間とどう違うのかという微妙な問いかけ、アメリカ人とはなにかという独特なアイデンティティの確立への意志が、あるときは引け目となり、またあるときは強い独自性となって、たえずアメリカ人につきまといてきていることは確かだろう。そのことが祖国放棄を通過したのちに、おのずと祖国への「回帰」をもたらさずにはおかない底知れないエネルギーではなかったろうか。1930年代のアメリカがその回帰路線の中で示そうとした態度、過去に決別し、それがいかに暗くあろうとも、アメリカの社会の現実を目をすえ、さらにそこを突破して、現実の向こう側へ一歩踏み込もうという頑強不屈の意志と柔軟この上ない行動力が今世紀も終ろうという現在に連なっているように思える。そこからアメリカ人の変身を恐れない勇敢さが由来しているのではないか、変身をもものもしない勇気を体得したとき、アメリカがアメリカらしく自立したのではないか。“better change”こそ、アメリカ独特の哲学ではないのか。Keith Sexton教授が「絶えざる変更」こそ生涯教育であると言うとき、生涯教育にこそ、少なくともアメリカのひとつの顔がある、と私は直感した。果てしなく広い、広くてわからない国アメリカ、矛盾が矛盾なく共存してしまう国アメリカ、そして住みはじめてまだ四カ月の国アメリカを知るために、新参者にすぎない私が偶然手にすることのできた糸口のひとつがアメリカにおける生涯教育に関する調査なのである。

大学に入学するのは高校を卒業したばかりの18歳の男女である、などという考え方も実態もないアメリカの大学の現実を私はこの四カ月間見てきた。退役軍人がフルタイムの学生としてクラスにいるかと思えば、まだ17歳で高校も卒業していないのに、高校の単位は全部終了しているので、大学の単位を正式に登録して、ためこんでいる者もいる。WSUの教育学部の学生400人の平均年齢は29歳である。女子学生では結婚、出産、育児と数年のブランクをおいて学生に復帰したというケースがきわめて多い。なかには40歳もこえていようかと思われる離婚組もあり、彼女らは大学院をも狙い、きわめて

意欲的で成績も抜群である。彼らは自分の人生は自分で開拓するのだと信じており、死の瞬間までが自分の人生であり、人生の質の向上を計るのにもいつでもおそすぎることではないと本気で思っている。

これに比べて、大学への進学生は18歳の男女であり、18歳人口の激減期の到来に頭をかかえてしまうのが日本のようだ。日本人の甘えということがよく話題にのぼるが、甘えとはある意味でchangeを恐れ、既成概念や既成事実にもたれかかることではあるまいか。日本でも社会人入学や外国人入学の制度が設置されたことはきわめて斬新的であるが、利用度はまだ少ない。日本では18歳人口が激減すれば、大学の危機であることは今のところ事実であり、女性が23歳を越えれば、能力の是非にかかわらず、もはや十分な就職口がないことも事実である。アメリカ人は「なんという才能の浪費でしょう！」と驚く。日本人の心の奥底に住む年齢へのこだわりが吹っ切れたらいいと思う。吹っ切れないことには生涯教育は始まらないと思う。

アメリカは民族のるつぼであり、文化のるつぼである。多民族、多文化をかかえて、果て知れない広大な土地に拡散する50州のややこしい国である。星条旗だけがいつでもどこでもひるがえり、そこがアメリカであることを忘れさせない。「ここはアメリカなのよ。あなたさえその気になれば、どんなことでもできるのよ。あなたはここで変わることができるのよ。あなたは今からあなたの人生を変えることができるのよ」と星条旗が語りかける。人生の質の向上を計りたいという猛烈な願望、自分の心がけ次第で向上は計れる筈だという疑う余地もない強い確信、これらがアメリカ人の個性を作り、その軽快な活動力を支えるエネルギーなのだ、と考えると、私は少しはアメリカなるものが見えやすくなったような気がした。

II 新しい試みを歓迎する社会背景

すでに書いたように、生涯教育はたえざる変化に対応しなければならない専門分野である。もちろん、そこでは常に喜んで新たな挑戦に向う創造的な人間を必要とする。生涯教育学部に働く教授グループはたえず起る新しい問題に対する創造的な解決法を見出し続けなければならない。事実、彼らは日毎にそれを実行している。そして彼らの創造的尽力をことごとく認め、助け、励ます背景がアメリカ社会全体にあるのである。ほんとうにわずかな、まだ四カ月あまりのアメリカ生活ではあるが、私が最も強烈に得た印象はアメリカ

カは新しい文化を創り出す条件を備えているということであった。あとで、私自身が全面的にかかわったひとつの生涯教育のプログラムを例としてあげたいと思うが、ともかく私のような新参の外国人の言うことを一点の疑念もさしはさまずに、とりあげ、協力してくれたアメリカの友人たちのおかげで、1992年1月6日、冬学期の初日に、私はThe International Friendship Dance FestivalをWSUの大劇場ブラウニング・センターでスタートさせることができたのである。

このプログラムに直接かかわって痛感したことはアメリカ人は新しい挑戦を決してとめないということ、新しいことはいいことだとする気持ちが強くアメリカ社会全体にあること、足ぶみをせず、すぐさま実行する驚異的エネルギーにいつもあふれていること、失敗するかもしれないなどと夢にも思っていないこと、失敗したとしても誰もとがめないどころか、まったく気にしないだろうということ、等々。つまりアメリカは新しい文化を創り出す条件を備えているという結論に導かれたわけである。それは新しい挑戦はひとまずとめる日本人、新しいことはすべて危険なことであり、前例がなければ、それを口実に排除しようとする日本人ときわめて対照的であり、今回のような私の計画も、日本ならば暴挙としりぞけられるか、「夢のようなお話で」とか「雲をつかむようですね」と一笑にふされたに違いないのである。すると、人間を殺さずに、生かし、のぼさうとしてくれるアメリカが私にはまぶしく見えてくる。

私の垣間見たところ、生涯教育のとりくみ方はまったくアメリカ的であり、まったく日本的でないのである。しかし、それだけに啓発的であり、新しい発見と参考的要素を多分に含むものと思う。

新しいことはいいことだとするアメリカ的な楽天主義も一朝一夕にしてできたものではないだろう。北海道同然の短い歴史しか持たないアメリカが古き良き伝統に輝く対岸のヨーロッパをなにかにつけて意識し、依存する習癖から容易に脱皮できなかつたこともまた歴史的事実である。その依存心を政治的な独立宣言にとどまらず、文化的独立宣言をもって断ち切るにはアメリカは開拓の歴史以上に長い歳月を要したのではないかと思う。その努力の先端に生涯教育を位置づけてみると、これもまた興味深いアメリカ研究に見えてくる。

Ⅲ アメリカにおける生涯教育

生涯教育を促進させようという目的で、アメリカにNUCEA (The National University Continuing Education Association) が誕生したのは1915年である。しかし、アメリカにおける生涯教育的発想の根は深く、通常その最初の提唱者としてあげられるのはThomas JeffersonとBenjamin Franklinの二人である。

Thomas Jefferson (1743-1826) は言うまでもなくアメリカ建国期の有能な政治家であり、1775年には大陸会議に出席して独立宣言の原文を執筆、1789年Washingtonが初代大統領となると、そのもとで國務長官を勤め、やがて共和党の首領として1801年から1809年まで第三代大統領を勤めた大物である。彼は共和政治に必要な善良な市民と指導者を育成すべく、教育振興に励み、革命後のカリキュラムにはより実用性を重んじ、法律と警察の教授職を提案した。以来、多民族・多文化のアメリカ社会の秩序は法律と警察によって保たれているのである。Benjamin Franklin (1706-90) もまた実践第一主義、自我と自力を信じてやまない典型的なアメリカ人として有名であるが、彼はまたアメリカにおける生涯教育の「植民地時代の父」として知られている。ボストンの貧しい職人の息子に生まれ、学校教育にはほとんど無縁でありながら独学で最高の知識を身につけ、1727年、21歳のとき、Juntoと呼ばれるディスカッション・クラブを設立し、これがその後の多くの教育的組織を生む契機となったことから生涯教育の父と呼ばれるようになったのである。もちろんアメリカ文学史に名高い彼の『自伝』(Autobiography, 1868)はすぐれた散文の代表作である。ともあれ、JeffersonやFranklinに明白な教育についての信念、つまり教育は民主政治のにない手であるすべての市民の生活の質を向上させるものであるという信念は今日まで生き続けているのである。とりわけ生涯教育の理念の中に生き続けていると思う。

アメリカ人の考える生涯教育の理念はきわめて実践的で明快である。すなわち、学習は人類の進歩の基礎である、教育はすべての人間によりよい生き方を提供する、大学のプログラムは市民に生涯、学ぶ機会を提供する、教育者は学習が生涯続くプロセスであり、大学が従来からの伝統的方法とは異なるやり方でとどけられる生涯教育プログラムを通して、おとなたちに知識を広める機会と責任を持っていることを承認しなければならない、というようなこ

とである。

では次に、なぜ改めて今世紀、生涯教育が現代社会の緊急課題として重視され、ほとんどすべての大学において強力な関心と注目を集めているのか、を探ってみたい。とりわけここではアメリカのみにとどまらず、日本にもあてはまるとされる人口学からの報告と大学側の柔軟な対応について眺めてみたいと思う。

日本でも最近、人口の高齢化と18歳人口の激減がよく話題にのぼる。もちろん18歳人口が急に消えたわけではなく、18年前から出産率がおとろえたということだろう。これをアメリカ流に考えると、1969年から1984年までの15年間におとなが激増したということになる。つまりアメリカは第2次世界大戦終結後の1946年から64年までが史上空前のベビー・ブームで、この間に生まれた人口は7700万人、アメリカの総人口の三分の一を占める。1992年には28歳から46歳を迎える世代である。アメリカ人は大学という市場にこの世代を積極的に取りこもうと考える。生涯教育の受講者について、教育統計センターが最近発表したデータによれば、10人中3人は25歳から34歳の間、10人中4人は35歳から54歳の間で、つまり10人中6人までがベビー・ブーム世代に属するのである。人口学はベビー・ブーム世代こそ今後の大学の最上の顧客ですよと警告していることになる。

事実、ベビー・ブーム世代が18歳になった1964年から1982年にかけて、アメリカは高等教育の空前の拡張を見ている。ベビー・ブーム世代はまたアメリカ史上、もっとも高度の教育を受けた世代なのである。もうひとつ、注目すべきことがある。ベビー・ブーム世代の女性がアメリカの男女平等を高等教育において勝ち取ったということである。ベビー・ブーム世代は4人に1人は4年制の大学を出ているというのが統計の報告であるが、25歳から34歳の女性もまた4人に1人の割合で大学卒の学位を持っており、これを55歳以上の女性には10人に1人の大卒者も見当たらないのと比べるならば、その進歩のほどは明白である。アメリカ女性の男女平等に向けての運動は女性が高等教育を受ける権利、それと関連して女性がよりよい職場によりよい地位で進出する権利の両面で展開されたと見られよう。

またこの社会進出に情熱を燃す女性たちと生涯教育がどう結びつくのか、紹介しておこう。30年前、1960年代には女性はあまり外に出て働いていなかったし、働いていたとしても結婚、出産で仕事をやめるのがおきまりのパター

ンであったから25歳から44歳の女性はまず職場にはいなかった。1970年代、働く女性は増えたが、従来のパターンはあまり変わらなかった。1980年代、ようやくこのパターンが変わり、25歳から44歳の女性の四分之三は職場からドロップ・アウトしなくなったし、より報酬のよい仕事を求めるようにさえた。子育ての終了した年輩女性の再復帰も盛んになり、彼女らはより高度な資格や技術を身につけたいと望むようになる。大学は彼女らの望むものをすかさず提供すべきであるというのである。生涯教育はもちろん女性のためだけのものでもなければ、男女平等の理念にこだわるものでもないが、これによってより多くの利益を得ているのは女性かもしれない。

もうひとつ、これも日本のケースにあてはめて参考になると思うので、あげておきたいことがある。それはアメリカの人口学が生涯教育の有望なマーケットとして、55歳以上のアメリカ人をあげていることである。これまでほとんど無視されてきたこの世代が近年の調査で5000万人以上に達しており、3人のおとな中1人は55歳を越えているという事実が明白となり、この世代に対する態度が変わりはじめたのである。アメリカ人の引退は55歳から64歳であるが、彼らの全員が労働市場から去るわけではない。健康にも恵まれ経験にも豊富なこの世代を進んでやといたいと願う職場もあれば、コントラクト労働者として、あるいは1年か2年のプロジェクトでコンピューター・プログラマーとか技師として勤めることも、自由契約のコンサルタントとして必要に応じて、彼ら自身のスケジュールに合わせて紛争解決に乗り出すことも可能である。いづれにせよ、彼らは生涯教育の助けを借りて、55歳までは多忙でできなかったことを、55歳からの第二の成熟時代にとりもどせるということである。

もちろんアメリカの大学側も18歳から21歳という伝統的な大学生の減少に手をこまねいているわけにはいかなかった。限られた予算、縮小されがちな経済的援助の前に、各大学は生き残るためには新しいプログラムと活動を創造し、かつ従来とは異なる新しい大学外のグループとの関係を通して売り出さなければならなかった。このあたりが生涯教育が今日の大学の緊急課題の一つとなった理由であろう。こうして人々は生涯、大学と社会を往復しながら、生活の質の向上を無限に求めるのである。

IV 生涯教育のカリキュラム例として Weber State Universityの場合

Weber State Universityは創立102周年という歴史あるユタ州立大学である。全7学部を擁する。Health Profession, Art and Humanities, Business and Economics, Science, Social and Behavioral Science, Applied Science and Technology, Continuing Education, なかでも教育、英語、工学、健康科学などの教育分野が名高い。Art and HumanitiesのDean Howardの招きで、私の今回の渡米は実現した。WSUは、30年（1961-1991）の北星生活の後に、ほとんど別世界がこの地球上に存在することすら忘れかけていた私に、突如新世界を見せてくれた大事な大学となった。だしぬけに着陸したこの未知の大学は私に会う前から私に期待し、私を待っていてくれた。そして私の日本での30年の蓄積を全面的に信頼し、採用してくれた。私の所属はDepartment of the Performing Artsであるが、後述するように生涯教育学部のお世話にもなった。WSUの生涯教育学部の紹介でこのレポートを一応まとめたいと思う。

「生涯教育学部は生涯を通じて学習を続けようと思っている人、自分の専門分野を広げようと考えている人などを対象にした学部です。働いている社会人のためのクラスもあり、登録されている講座は1400以上にもわたります。学生は各年30000人にのぼります」という実状報告はまずその必要度の高さを示している。パートタイムの学生、オフキャンパスの学生を対象とし、彼らに教育プログラム、大学のサービスを提供しようという発想にもとづき、われわれの想像を絶するクリエイティブな努力を積み重ね、われわれの想像を絶する自在なものの考え方、柔軟なプランの立て方でダイナミックに動いている。いかにもアメリカ的である。

生涯教育学部が受け入れる学生の多くは仕事や家族を持っており、通常の大学生のような授業参加は不可能な人々である。昔ならば大学進学を断念し、そのくやしさを生涯持ちこしたに違いない。生涯教育学部はまずそうした事情を持つ人々にどうしたら教育の便宜が計れるかということを考える。かつて貧困故に働かねばならず、夜学に通ってもなお大学の門は固く閉ざされていた明治世代の人々がこれを聞いたら、涙を流して狂喜することだろう。

<Evening Weekend School>

通常、アメリカの大学は月曜から金曜までで、土、日は休みである。大半の職場も同様であるとすれば、まず考えられるのが4時半以後のEvening SchoolとWeekend Schoolで、しかも昼間の50分授業、週3回というシステムをとらず、3時間授業、週1回制をとり、10週で完結する仕組みのクラスが多い。

<Independent Study>

次に容易に考えられるのがIndependent Studyという呼び名で普及しているもの。Home Studyと言いかえたら理解しやすいのではないと思う。毎日、大学へ出かける必要もなく、自分のペースで個別に取れる授業方式である。いつでも、どこでも展開される大学の「ポータブル・プログラム」である。大学のキャンパス内に終始留まることのできない勤労学生、軍隊の隊員、教師らに広く利用されている。登録学生数は1000人を越える。コースは83用意されており、学生たちはそこから自在に選択することができる。The University of UtahのカatalogではCorrespondence Study通信教育とも呼んでいる。45コースの通信教育が可能とある。一年中、いつからでも開始できる。

適宜、提供されるプログラムには種々の会議、ワークショップ、セミナーなど、2日から5日間、キャンパスの施設、あるいはオフキャンパスの場所を使用して開催されるものがある。ほぼ800種類。

<Travel Study>

Travel Studyのプログラムは生涯教育学部で作られるが、海外での経験を獲得することによって教育を高めたいと望むすべての学生に開かれている。現代の輸送機関の発達、敏速な情報伝達手段を利用すれば、参加者は文字通り世界を自宅のドアのすぐ外側に発見することができるというものである。世界を見るのと見ないのとでは雲泥の相違がある。しかもプランから引率まで、大学の専門の教授が当るのであってみれば、効果に疑う余地はない。イギリス・エッセイの祖Francis Bacon (1561-1662)でさえ、旅はその地をよく知り尽くした先覚の案内によるのがいいと言っている。

<Early College Program>

これは実際に私が担当したクラスに高校生がいて知っただが、このプログラムを利用すれば、高校生のうちから大学の授業に出席し、正式に単位が取得できる。現在、200人の高校生がこのプログラムに参加している。

このほかにも会社の社員教育を狙った<Professional Development>、すべての年齢層を対象とした<Special Programs>では、小学生のために科学を盛りこんだScience Fair、飛行機の好きな子供たちには1週間のAviation Campという風に、思いつけばすぐにプログラムを組み、それをただちに実行するのである。提案から実行までの期間はおよそ一年である。

<International Programs>

大学のキャンパスから外へ出向くTravel Studyとは逆に、外国から学生を受け入れるのがInternational Programsである。目下、定着しているのは日本、台湾、韓国の学生を対象としたユニークな学習体験である。2年制の長いものから1年制、3週間、2週間、1週間と期間もさまざまである。実行はこれからというプログラムに<Global Community>という企画もあり、英語圏以外の9カ国から一国一名を原則に9人の18歳以上の若者を集めて一件の家に住ませ、英語浸け(Immersion Experience)の4週間を過ごさせようというユニークなものである。ここでは日本学生のために組まれているInternational Programsを紹介して、このレポートをしめくりたいと思う。

1. 1年制のイングリッシュ・ランゲージ・コース

授業はすべて英語。Non-Creditのコースだが、各学期(quarter)ごとにテストがあり、それにパスした学生のみが次の学期に進むことができる。相当量のホームワーク、課題が出題される。1時間の授業に2時間の予習が原則。ESLの授業はConversation, Grammar, Listening, Writing, Computerの6つに分れており、学生はその英語力に応じて10人前後にグループ分けされる。もちろん、ESLの授業は英語圏以外の国からの留学生と一緒である。さまざまな国の人々との交流が生まれ、友人もできるグッド・チャンス。7年間ESL一筋というTimothy R. Conrad教授は「日本人学生はReading, Writing, Grammarについてはとてもすばらしい。し

かし、コミュニケーション、つまりListeningとSpeakingに弱い人が多いようだ。テレビ、ラジオ、ビデオ、テープ、なんでも結構、日本にいるときから英語を聞いたり、話したりする機会をたくさん作ることが大切でしょう」と語る。

ESL以外では、アメリカの文化芸術などを話題とするカルチャー・クラス、基本キーボード入力、演説原理、美術入門、陶芸、彫刻、音楽入門、基本写真術などの分野から選択するアカデミック・クラス、TOEFL受験のためのスペシャル・クラス、テニス、ゴルフ、ボーリング、スキー、バレーボール、水泳、エアロビクス・ダンス、アーチェリーなどがずらりと並ぶスポーツ・クラス、さらにアメリカの暮しには欠かせないドライバーズ・クラスまである。

2. 2年制のセクレタリー・コース

2年間に93単位取得すると、卒業証書とAssociate of Applied Science Degreeが授与される。これは日本の文部省でも短期大学卒業者に与えてはどうかと検討中の準学士号のことである。パーソナル・コンピューターやワープロなど、OA機器のオペレーション技術は日本からの若者に人気がある。そのほか無論、外資系企業に就職した際に不可欠の語学力のマスター、さらにアメリカでの毎日の暮しを通して、アメリカの文化、アメリカ人のものの考え方、行動の仕方、などの理解を目標にカリキュラムが組まれている。授業時間は1週平均12時間から18時間だが、どのクラスもハードであり、1時間につき2時間の予習は欠かせない。

3. Christmas Ballet Exchange Homestay Program

これは1991年12月27日から1992年1月7日まで、日本の札幌とアメリカ・ユタ州のオグデン、北星短大とWeber State Universityのあいだで実施されたごく最新のInternational Programsの一例である。私が1991年の秋学期からWSUで教えるようになってから、同じWSUの生涯教育学部のKazuko Monobe教授の全面的協力を得て、生涯教育にはまったく未経験の私がプログラム・ディレクターのメンバーに加えていただき、およそ半年がかりで実行にこぎつけたものである。計画の初めから実行の終りまで、直接プログラムの細部にまでかかわり、アメリカ側からも日本側からもたえず起ってくる普段は見えないカルチャー・ショックというかコミュニケーション・ギャップのようなものが感じられ、私には貴重な体験であっ

た。

このプログラムのハイライトでもあるThe International Friendship Dance Festivalは1992年1月6日、WSUの冬学期の開始を待ってBrowning Centerの大劇場で上演された。私は芸術監督としてすべてのプログラムと出演者を決定し、その振付と指導に冬休みをすべて費した。休暇であるにもかかわらず、アルバイトをやりくりしながらいこにきてくれたWeberの学生、冬のフリー・ウェイを運転して加わってくれたUniversity of Utahの学生、冬休み明けの第一日目というのに心よく出演してくれた先生たち、そして日本からの学生たちと彼女たちを受け入れてくれたホスト・ファミリーのバレリーナたち、総数45名にものぼった。プログラムの第1部はClassical Ballets from St. Petersburgと題して、Olga Sapphire伝授の古典バレエを並べ、第2部はDance Suites from Around the Worldと題して公演のタイトルにふさわしく各国のキャラクターものを並べた。私としては、あのスターリン支配の困難な時代に日本に住みついた一人のロシア人の、私の恩師でもあるバレリーナが必死の思いで日本に伝え、残したバレエの数々を、彼女の生前の希望通り、アメリカで上演できたこと、さらに加えて国際的友情の第一歩がこのような形で確実に記せたことがうれしかった。最後に参考までに今回実施した12日間のChristmas Ballet Exchange Homestay Programを付記する。

Christmas Ballet Exchange Homestay Program :

Program directors : Toshiko Sato

Kazuko Monobe

Gary Taylor

Dec. 27, Friday—Leave Narita airport in Tokyo. Arrive in Salt Lake City on Continental flight #1974, at 4:15pm. Orientation for host families at the airport. Students will return with the host families from the airport.

Dec. 28, Saturday—

* Host family drop-off : 10:15am.

10:30 : English class

11:30 : Manner class

1:00 : Birthday party at McDonalds

アメリカにおける生涯教育の一考察

3:00: Ogden city tour, etc.

5:30: Ballet class

* Host family pick-up: 7:40pm

Dec. 29, Sunday-

* Free time with host family

Optional excursion to Park City. Students who wish to go should be dropped off at 9:45am, and picked-up at 6:30pm.

Dec. 30, Monday-

* Host family drop-off: 8:15am

Ballet class at the University of Utah, Ballet-related activities in Salt Lake. Japanese lunch. Shopping time given at Crossroads Mall downtown.

* Host family pick-up: 6:00pm.

Dec. 31, Tuesday-

* Host family drop-off: 8:30am

9:00: Ballet and Jazz classes at the Browning center

Chinese lunch at ABC

1:00: Party planning class

2:00: Preparations for new year's party.

Jan. 1, Wednesday-

Free time with host family.

12:00 noon: New Year's party at Kirt and Grace Wallings.

2:00pm: Free time

Jan. 2, Thursday-

* Host family drop-off: 8:30am.

9:00: Ballet class

10:15: Sato sensei's class

Lunch at KFC

1:30: Manner class

2:30: English class

3:30: T-shirt design activity/contest

* Host family pick-up: 5:00pm

佐藤 俊子

Jan. 3, Friday—

- * Host family drop-off : 8:30am
9:00 Ballet class
Lunch at TBA
English class
Dinner at the Prarie Schooner restaurant
Attend the Nutcracker performance of the Ballet West
- * Host family pick-up : 10:30pm

Jan. 4, Saturday—

- * Host family drop-off : 8:30am
9:00 : Ballet class
Lunch at Taco Maker
English class
- * Host family pick-up : 2:30pm

Jan. 5, Sunday—

- * Host family drop-off : 8:30am.
Ballet classes, lunch at the Greenery, preparation for the dance festival tomorrow night.
- * Host family pick-up : 5:00pm

Jan. 6, Monday—

- * Host family drop-off : 12:30am
1:00 : Dressing room arrangements
4:00 : Dress rehearsal
Light snack for dinner
- * 7:30 : International Friendship Dance Festival at the Browning Center

Jan. 7, Tuesday—

- * Host families take the students to the airport by 5:00am.

Host family responsibilities :

- * Provide transportation to and from the college each day.
- * Provide breakfast and dinner for the student unless otherwise

stated in the itinerary.

* Inform a program director of any problems, health or otherwise, that arise during the duration of the program.

V 結 び

"I would like to express my sincere appreciation to all the kind and wonderful people who I have met in Utah, especially Dean Howard, Ms. Joanne Lawrence, and Mrs. Kazuko Monobe.

I believe that tonight we are making a first step toward a meaningful international friendship. I want this performance to be the first of many future performances and through our continued dancing and growth together, I hope we will help create a more harmonious and beautiful world. Thank You."

これは上記のDance Festivalの折、私が述べたClosing Statementであるが、このレポートについて感謝しなければならない教授の方々も同じであり、遠距離を克服して友情を培い、"a more harmonious and beautiful world"を作りあげる小さな力になりたいということも生涯教育の目標とするところに沿うと思うので、このレポートの一応の結びとしたいと思う。

References

A.J.Cropley & R.H.Dave : Lifelong Education and the Training of Teachers (1975)

Michael Langenbach, Ph.D. : Curriculum Models in Adult Education (1988)

Theodora Penny Martin : The Sound of Our Own Voices—Women's Study Clubs 1860-1910— (1987)

Handbook on Continuing Higher Education edited by Quentin H. Gessner (1987)

Stephen D. Brookfield : Understanding and Facilitating Adult Learning— A Comprehensive Analysis of Principles and Effective Practices— (1986)

佐藤 俊子

A Report on Continuing Education in America

Introduction—My New Life in America

I Continuing Education is the Constant Change

II The Background for Continuing Education in America

III An Overview of Continuing Education in America

IV Curriculum Models in Continuing Education—In Case of Weber
State University

V Closing Statement

Toshiko Sato